

## 大宰府と鴻臚館

福岡市埋蔵文化財課 菅波正人

### 古代東アジア外交の玄関口 大宰府と鴻臚館

博多湾は九州の北片に位置し、中国大陸や朝鮮半島との交流の窓口として古くから重要な場所であった。歴史書には「那津(なのつ)」「博多津(はかたつ)」という名称で登場する。

古代の博多湾は大宰府の対外交流の拠点であった。大宰府は九州を統治した外交・行政の中核で、外国使節・海商を迎えた現場の施設が筑紫の鴻臚館(こうろかん)である。

史料の上で「鴻臚館」の名称は、平安時代初めである。海外からの使節や日本から派遣する使節の利用などのために設けられた迎賓施設(客館)として記されている。

鴻臚館は平安京、難波津(なにわづ)、筑紫に置かれていた。そのなかで、考古学的調査が進み、施設の様相が解明されてきたのが、筑紫の鴻臚館(以下、鴻臚館とする)である。

### 鴻臚館成立の背景

663年(天智2)、倭が白村江の戦いで唐・新羅(しらぎ)の連合軍に大敗した。これ以降、東アジアの国際関係は緊張した状況になった。倭王権は国の守りを固める一

方で、唐、新羅との国交の回復に努めた。688年(持統2)に新羅使金霜林らを筑紫で迎えている。その時に利用された施設が筑紫館である。その後、筑紫における外国使節を迎え入れる施設として利用されることになる。発掘調査の成果から、筑紫館はこの頃に成立したと考えられる。

### 鴻臚館跡発掘の成果

鴻臚館が設置された場所は早良郡と那珂郡の郡界にもあたり、郡の中心施設や駅家などとも少し離れた場所にあった。また、両側を入り江ではさまれる立地は、隔離性と防備性に優れ、外国からの使節を対応する施設にふさわしい場所だったと考えられている。鴻臚館が約350年間ここに存続したのは、そうした環境が保たれたからにほかならない。

鴻臚館には、外交使節に宿泊や衣食などを供給する客館のほか、交易品などを保管する倉庫、荷物の荷揚げ施設、防備のための施設、厨房などの付属施設があったと考えられる。このうち、発掘調査で判明しているのは客館部分で、1987年以降の発掘調査により、五つの時期の建物変遷が明らかになっている。

第Ⅰ～Ⅱ期(7世紀後半～8世紀末)は、施設は筑紫館(つくしのむろつみ)と呼ばれ、外交使節の迎賓などが行われた時期である。第Ⅲ～Ⅴ期(9世紀初～11世紀中ごろ)は、施設の名称と役割が次第に変質し、新羅や中国の海商との交易が行われた時期である。

## 第Ⅰ期の構造と特徴

第Ⅰ期(7世紀後半～8世紀前半)は、丘陵に入り込む谷で南北に隔てられて施設(以後、それぞれを南館、北館と呼ぶ)が造営された時期である。以後、鴻臚館は廃絶するまでこの配置が維持される。南館・北館とも掘立柱建物からなるが、主軸方位や構成が異なっている。

南館、北館の建物構成から、郡の役所の建物配置に類似する南館は、儀式や迎賓の場としての役割が想定される。一方、堀が周囲を巡る北館は、部外者との接触が避けられた外交使節が滞在する宿舎と考えられる。これらの機能を兼ね備えていたことが、第Ⅰ期の施設の特徴である。

## 第Ⅱ期の再整備と役割

第Ⅱ期(8世紀前半～末)の施設は、南北約200m、東西約100mの範囲を大規模に造成して敷地を広げ、中央の谷の北側斜面には高さ約4.2mの石垣が築かれる。南館・北館は規格性の高い建物配置となり、東西長約74m、南北長約56mの長方形区画の布掘りの堀が巡り、東側に門が付く。大宰府政庁Ⅱ期と同様の鴻臚館式軒瓦、大宰府式鬼瓦などが多数出土しており、瓦葺建物に変わったと考えられる。

第Ⅱ期の施設は大宰府政庁の整備と一体的に行われたものであり、新羅や渤海との外交関係の強化をめざした造営事業であったと考えられる。

この時期の筑紫館は、遣唐使や遣新羅

使の風待ちの場所でもあったが、基本的には新羅の使節に対応するための施設といえよう。新羅の使節が来航すると、大宰府から政府にその目的が報告され、使節は筑紫館で宿泊し、衣食などの提供を受ける。京に入ることが許されると、使節は京で公式の迎賓を受けることになるが、許可されない場合は大宰府に留まることになる。その場合、使節は大宰府で迎賓を受けた後、帰国しているが、筑紫館での迎賓の記事は見られないことから、迎賓については大宰府で行われ、筑紫館は宿泊と衣食などの提供が主な役割になったと考えられる。ただし、鴻臚館で迎賓を行われなかったといっても、滞在中の使節に酒食を提供しなかったというわけではなく、慰労の宴などは行われていたと考えられる。

## 第Ⅲ期の変貌と海商の登場

第Ⅲ期(9世紀初～後半)は、施設の名称が鴻臚館に変わり、石積みの基壇を持つ礎石建物が設けられた時期で、第Ⅱ期の建物方位や中軸線を踏襲した回廊状の建物とその内部に長大な南北建物が配置される。施設は大きく様変わりし、威容を誇るものになる。9世紀前半は、天皇の方針で、施設の名称を中国風に呼び変える時期であり、その風潮が改修の契機となったのかもしれない。

しかし、新羅との外交使節の行き来が途絶え、唐への使節の派遣も停滞したこともあり、外交施設の役割は一層低下する。

ところが、施設の役割に大きな変化をも

たさせたのが、新羅の海商(かいしょう)の来航である。それまで外交使節により行き来していた人々やモノが、新羅の海商により行き来するようになっていく

新羅の海商は交易を求めて大宰府の役人と結びつきを強くするが、国内での動乱がきっかけとなり、842年(承和9)、新羅の海商の入境が禁じられる。9世紀後半以降は、新羅に代わり、唐の海商が交易の担い手となる。

海商が来ると大宰府は積荷を調べ、朝廷が必要なものを京に送り、残りは大宰府が管理して民間交易を行った。鴻臚館は海商の宿泊や衣食の提供に使われた。

9世紀後半からは朝廷の唐物使が海商との交易を担当し、はじめは交易の代価は貢絹綿(税で納められた真綿)であった。10世紀以降は砂金となる。鴻臚館跡から高純度の砂金が出土している。

砂金は陸奥国から納められていたが、10世紀末からは納入が途絶え、大宰府の米や絹が代わりに交易の代価となり、11世紀に定着。唐物使の派遣はなくなり、大宰府が直接取引を行った。

海商との交易が始まると、鴻臚館で貿易陶磁器が見られるようになる。中国浙江省(せっこうしょう)の越州窯(えっしゅうよう)系青磁や河北省(かほくいしょう)の邢窯(けいよう)系白磁、湖南省の長沙窯製品といった、当時アジアで広く流通した品々である。

このような外国との交易品は「唐物(からもの)」と呼ばれ、希少で高級な唐物は、皇族や貴族たちにとってステータスシンボル

であった。9世紀後半以降は海商との交易は朝廷から派遣された唐物使という役人が担当することになり、国家の優先的な交易が行われることになる。

#### 第IV・V期の鴻臚館の盛衰

10世紀になると、中国海商の来航の記録も多くみられ、この場所がいわゆる「唐物交易」の場として、活況を呈していたことが推測される。鴻臚館では越州窯系青磁が大量に出土している。越州窯青磁は『源氏物語』で「秘色(ひそく)のような唐土(もろこし)のもの」と呼ばれた高級品である。

一方で、質の良くない青磁も大量に持ち込まれたようで、これらを廃棄した土坑も多数見つかっている。この状況を見ると、海商が持ち込んだ商品が必ずしも国内の需要にあうとは限らなかったのかもしれない。

11世紀になると、鴻臚館に6~8年と長期に滞在して朝廷や有力寺社との関係を深めながら交易をおこなう海商の記録が残っている。長期滞在となったのは、「年紀制(ねんきせい)」という来航年数を定めた規制の中で、最大限の利益を得るためだと考えられている。彼らは、規定された年数まで居住した後、短期間だけ帰国し、再び来航するという形を取っていたようである。鴻臚館跡で出土した陶磁器には碗の底に、商船の船主を示す「綱」や中国人名の「呉」「李」「鄭」などと墨書を記したものがあり、海商の長期滞在を示すものであろう。

## 鴻臚館交易の終焉と博多津唐房の成立

1047年(永承2)、「大宋国商客宿房」が放火されたという記録があり、この宿房が鴻臚館と考えられる。この時期を境に鴻臚館に関わる遺構や遺物は皆無となり、焼失した鴻臚館は再建されなかったと考えられる。

鴻臚館に來航した海商は朝廷との公的取引を行った後は、大宰府の管理の下、民間取引を行うが、その場所の一つと考えられるのが、博多である。博多の名称は、奈良時代の史料に「博多大津」と登場し、古代より重要な港であったと考えられている。

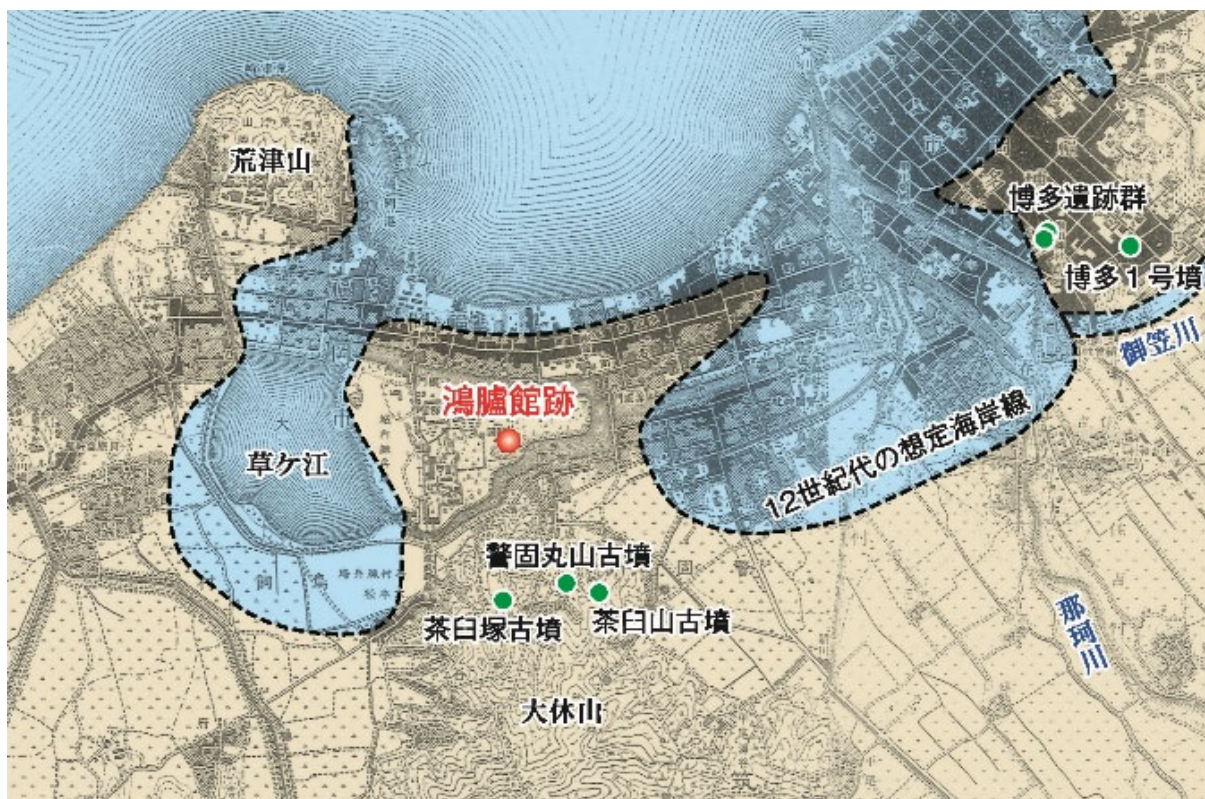
鴻臚館焼失後の11世紀後半以降、取引の拠点は博多に移る。民間取引の場として利用されていた博多が、鴻臚館に代わる

新たな管理貿易の拠点となったことは、自然な流れとして理解できよう。

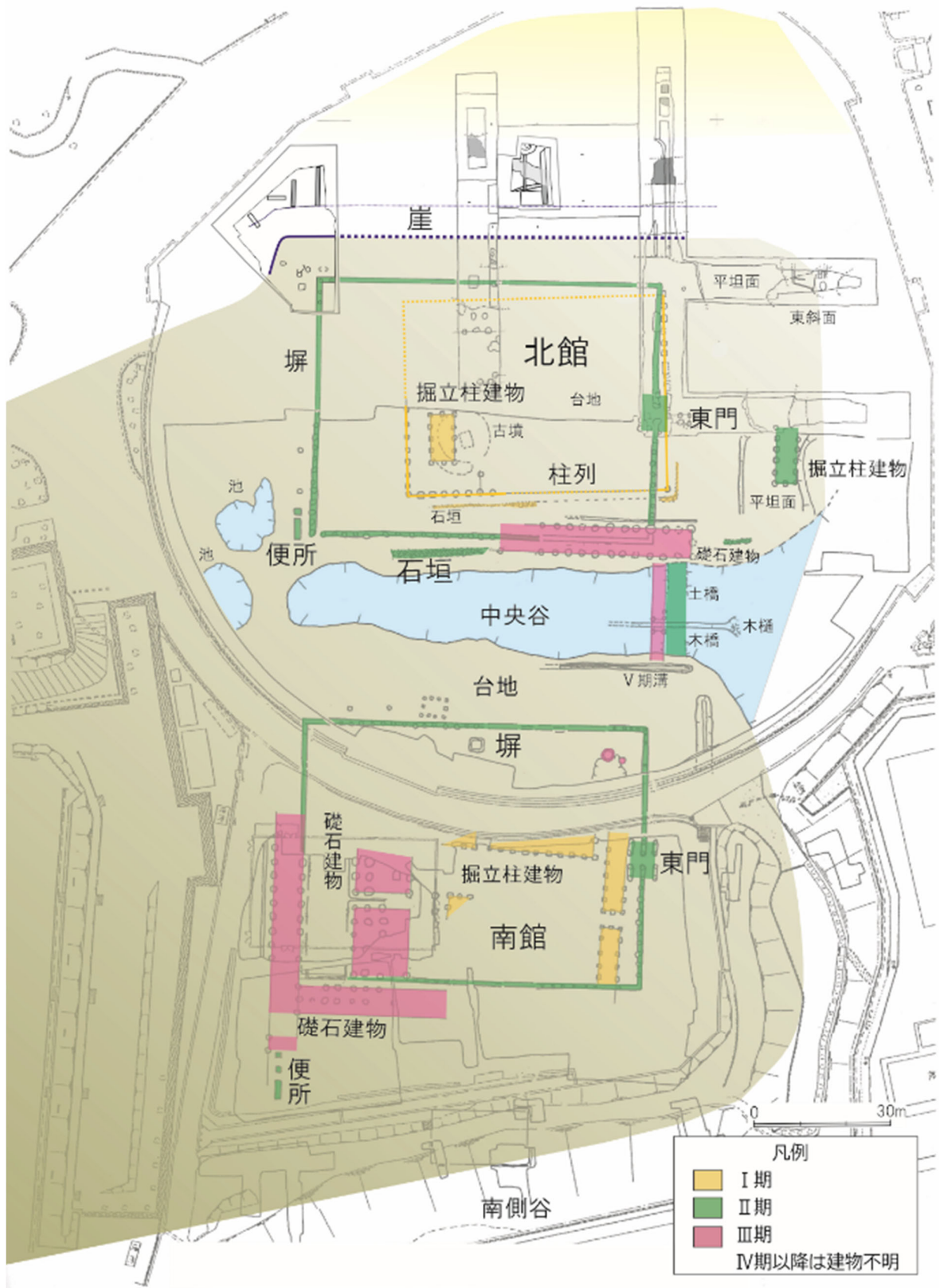
博多での取引の中心的役割を担ったのが宋の海商であった。彼らは博多の一角に「博多津唐房(はかたつとうぼう)」と呼ばれる居留地をつくり、港湾の整備を行った。遺跡群の南西側の那珂川河口域にあたる場所で港湾施設の遺構が発見されている。また、彼らは大宰府の役人と密接な関係を保ちながら、安定的な取引システムを築き上げた。鴻臚館から博多へ取引の拠点が移っても、博多湾の「場所性」は引き継がれ、博多は中世最大の国際取引都市として、発展することになる。

### 参考文献

菅波正人『古代の東アジア外交の玄関口 鴻臚館』(シリーズ「遺跡を学ぶ」172) 新泉社 2025



1 鴻臚館周辺の古地形推定復元



2 鴻臚館跡遺構変遷図(第I～III期)



3. 鴻臚館跡の発掘調査空撮合成写真



4. 鴻臚館跡第Ⅰ期南館 東側長舎建物(南から)



4. 鴻臚館跡第Ⅱ期南館 東門検出状況'(東から)



5. 鴻臚館跡第Ⅱ期中央谷北側 石垣(南から)



7. 鴻臚館跡第Ⅳ期南館 廃棄土坑出土貿易陶磁器



6. 鴻臚館跡第Ⅲ期南館 遺構及び復元建物